

第 32 回 日本病院薬剤師会 北陸ブロック学術大会 プログラム・要旨集

【メインテーマ】

北陸における病院薬剤師の未来を考える

- 日 時 : 令和 4 年 11 月 6 日 (日) 12 : 55 ~
会 場 : Web 開催 (同時配信型)
主 催 : 日本病院薬剤師会北陸ブロック
富山県病院薬剤師会

第 32 回 日本病院薬剤師会北陸ブロック学術大会

大会日程

12 : 30	Web 受付開始
12 : 55～13 : 00	開会挨拶 富山県病院薬剤師会 会長 挨拶
13 : 00～14 : 00	日本病院薬剤師会会長講演
14 : 00～14 : 30	大会長講演
14 : 40～15 : 20	一般演題 1
15 : 30～16 : 10	一般演題 2
16 : 20～16 : 50	一般演題 3
16 : 50～16 : 55	閉会挨拶 次回開催県 挨拶

ご案内

学術大会参加者の皆様へ

各自でパソコンから Zoom を使用し、学術大会に参加して下さい。

座長の先生へ

座長の皆様は、原則各県の配信会場にご来場いただき、座長をお願いいたします。
ただし、感染等のやむを得ない理由により、各県会場でのご登壇が困難な場合は、大会運営事務局までお知らせください。

演者の先生へ

ご発表の皆様は、原則各県の配信会場にご来場いただき、ご発表をお願いいたします。
ただし、感染等のやむを得ない理由により、各県会場でのご登壇が困難な場合は、大会運営事務局までお知らせください。

発表形式

- MS PowerPoint を使用した発表のみとします。
- 発表は口演のみとし、発表 8 分、質疑応答 2 分とします。スライド枚数に制限はありませんが、予め依頼いたしました発表時間は厳守されますようお願いいたします。
- パソコンの操作は、演台にセットされているモニター、キーボード、マウスを使用し、演者ご自身でお願いいたします。
- 本学術大会で使用しました講演データは、大会終了後に大会運営事務局にて責任を持って消去いたします。
- 利益相反 (COI) に関する情報開示について 一般社団法人日本病院薬剤師会利益相反の申告内容と開示に関する細則に準じて、講演時に利益相反についての情報開示をお願いいたします。

第32回 日本病院薬剤師会北陸ブロック学術大会

プログラム

開会挨拶 (12:55-13:00)

富山県病院薬剤師会 会長 脇田 真之

日本病院薬剤師会会長講演 (13:00~14:00)

座長 脇田 真之 (射水市民病院)

「地域医療に貢献する病院薬剤師連携の未来」

演者 武田 泰生 先生 (鹿児島大学病院)

大会長講演 (14:00~14:30)

座長 稲村 勝志 (富山労災病院)

「北陸における病院薬剤師の未来を考える」

演者 脇田 真之 先生 (射水市民病院)

一般演題1

14:40~15:20

座長 : 今川 静代 (金沢医科大学病院)

- COVID-19 対応病棟におけるニルマトレルビル/リトナビル処方運用体制の構築
○山本 麗央奈¹, 森谷 道生¹, 田中 みずほ¹, 上島 聖秀¹, 能澤 真希子¹, 高橋 慎太郎¹,
坂根 美和子¹, 橋本 恵里¹, 菓子井 達彦², 稲村 勝志¹
(¹富山労災病院 薬剤部, ²富山労災病院 腫瘍内科)
- カルバマゼピン内服中の患者がオキシコドン開始後疼痛コントロール不良のため
オピオイドスイッチングを行った1例
○毛利 早希, 木村 千尋, 山本 優佳里, 清水 寛将, 白崎 由貴, 新田 直美, 辻 正宏
(福井県立病院 薬剤部)
- ピッキングサポートシステムを用いた調剤過誤防止への取り組み
○細谷 拓史, 草富 翔太, 宮本 康平, 青柳 哲治, 笠川 益夫, 渋谷 貞一, 小川 純也
(福井赤十字病院 薬剤部)
- 院内認知症ケア研修会にAI音声付動画を使用した取り組みの評価
○中根 論士, 向畠 卓哉, 上塚 朋子, 佐野 正毅
(福井県済生会病院 薬剤部)

一般演題 2

15 : 30～16 : 10

座長 : 荒木 隆一 (市立敦賀病院)

5. 病院薬剤師偏在の要因分析
～医薬分業が薬剤師不足に与える影響について～
○渡部 貴晶¹, 浦田 愛理¹, 須河内 愛実¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}
(¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会)
6. 病院薬剤師偏在の要因分析第 2 報
～薬剤師教育 6 年制移行時における大学定員等の変化が薬剤師供給に及ぼす影響～
○浦田 愛理¹, 渡部 貴晶¹, 須河内 愛実¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}
(¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会)
7. 病院薬剤師偏在の要因分析第 3 報
～薬剤師需給から観た今後の薬剤師偏在の動向に関する考察～
○須河内 愛実¹, 渡部 貴晶¹, 浦田 愛理¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}
(¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会)
8. 後発医薬品ポスト 80%時代における基本的な医薬品情報の行く末は！
後発医薬品と先発医薬品の基本的医薬品情報に関する比較検討
○後藤 伸之¹, 古俵 孝明¹, 渡辺 享平¹, 塚本 仁¹, 酒井 隆全², 大津 史子²
(¹福井大学医学部附属病院 薬剤部, ²名城大学薬学部 医薬品情報学研究室)

一般演題 3

16 : 20～16 : 50

座長 : 宮崎 徹 (厚生連高岡病院)

9. ベンゾジアゼピン受容体作動薬の使用障害患者に対して多職種連携を行った一例
○金 俊孝, 坪内 清貴, 嶋田 努, 崔 吉道
(金沢大学附属病院 薬剤部)
10. 当院における IBD チームへの薬剤師のかかわり
○坂林 加奈子¹, 中谷 敦子², 本江 隼人³, 森本 睦未³, 吉川 英里¹, 麻生 美佐子¹
(¹高岡市民病院 薬剤科, ²高岡市民病院 消化器内科, ³高岡市民病院 看護科)
11. 退院時薬剤情報提供書を用いた訪問看護師との情報共有フローチャートの導入
○讓原 千広, 荒木 遼太, 小川 紗知, 波多 晶子, 中澤 美樹子, 橋爪 和枝, 窪田 真弓,
鶴居 勝也 (公立南砺中央病院 薬剤科)

閉会挨拶 (16:50~16:55)

次回開催県

一般演題 1

1. COVID-19 対応病棟におけるニルマトレルビル/リトナビル/の処方運用体制の構築

○山本 麗央奈¹、森谷 道生¹、田中 みずほ¹、上島 聖秀¹、能澤 真希子¹、
高橋 慎太郎¹、坂根 美和子¹、橋本 恵里¹、菓子井 達彦²、稲村 勝志¹

¹富山労災病院 薬剤部、²富山労災病院 腫瘍内科

【目的】ニルマトレルビル/リトナビルは、2022年2月10日に本邦で特例承認された2剤目の経口 COVID-19 治療薬である。ニルマトレルビルは、SARS-CoV-2 のメインプロテアーゼを阻害するプロテアーゼ阻害薬であり、ウイルスの増殖を阻害する。一方でリトナビルは、ニルマトレルビルの代謝を遅延させて体内濃度をウイルスに作用する濃度に維持する目的で併用される。そのため、リトナビルが他の併用薬と重要かつ複雑な相互作用を引き起こすおそれがある。さらに、ニルマトレルビル/リトナビルは腎機能に応じた用量調節が設定されており、これら 2 つの点よりニルマトレルビル/リトナビルが処方されるハードルは高いといえる。今回、薬剤師の介入により、ニルマトレルビル/リトナビルが円滑に処方できるよう運用体制の構築を行った。

【方法】医師・病棟看護師と検討し、以下の運用体制を構築した。

- ① COVID-19 患者の入院において、医師が重症化リスクを判断し、ニルマトレルビル/リトナビルの使用を考慮すると薬剤部に連絡を行う。
- ② 病棟薬剤師は入院患者の持参薬を確認し、ニルマトレルビル/リトナビルとの併用禁忌・併用注意を確認し、医師と協議を行う。
- ③ ニルマトレルビル/リトナビルが処方されることとなった場合、薬剤師が腎機能を確認し用量設定を行い、医師に確認した後調剤する。
- ④ 用法は看護師が内服確認しやすいよう、食前投与とする。

【結果】2022年4月以降、富山県でもオミクロン株 BA.2 系統に置き換わりが進み、ニルマトレルビル/リトナビルの処方が主体となったが、ニルマトレルビル/リトナビルの円滑な処方、調剤、投薬が可能となった。2022年5月から9月までの入院192件のうち95件でニルマトレルビル/リトナビルが処方された。そのうち通常用量例は43件、減量例は52件であった。

【考察】ニルマトレルビル/リトナビルの処方運用において、薬剤師の介入は重要であり、今後外来でニルマトレルビル/リトナビルが円滑に処方されるためには薬局薬剤師との連携が必須であると考えます。また、入院下において使用薬の把握が困難であったことから、普段からお薬手帳の推進が重要であると考えます。

一般演題 1

2. カルバマゼピン内服中の患者がオキシコドン開始後疼痛コントロール不良のため オピオイドスイッチングを行った 1 例

○毛利 早希、木村 千尋、山本 優佳里、清水 寛将、白崎 由貴、新田 直美、辻 正宏
福井県立病院 薬剤部

【目的】オキシコドンは CYP3A4 の基質であり、カルバマゼピンは CYP3A4 誘導作用を有する薬剤である。持参薬のカルバマゼピンを内服継続していた患者が、オキシコドン開始となったが増量後も疼痛コントロール不良であった。薬剤の相互作用によるオキシコドンの作用減弱が疑われ、オピオイドスイッチングを行ったところ、痛みが軽減し退院可能となった症例を報告する。

【症例】70 代男性。横行結腸癌、多発肝転移のため当院で加療していた。治療中に右恥骨転移がみられ、疼痛コントロールと放射線照射目的に入院となった。入院翌日よりオキシコドン 10mg/日以内服開始となったが、オキシコドンを増量するも疼痛コントロールに難渋し、オピオイド開始から 6 日間で 40mg/日まで増量となった。患者は入院時より、持参薬のカルバマゼピンを内服継続しており、薬剤の相互作用が疑われた。カルバマゼピンによる CYP3A4 誘導作用の影響を考慮し、医師に、グルクロン酸抱合により代謝されるヒドロモルフォンを提案した。提案時点でのオキシコドンの内服量はカルバマゼピンとの相互作用により過量に投与されている可能性があったため、副作用等考慮し、初期投与量 4mg/日を提案した。ヒドロモルフォン導入後、6mg/日で疼痛コントロール良好となり、自宅退院となった。

【結果・考察】カルバマゼピンは CYP の誘導作用を有するため、CYP の基質となる薬剤を併用する場合、開始後の薬剤の効果や副作用について十分に確認する必要がある。オピオイドは主に CYP3A4 で代謝される薬剤が多く、オピオイド開始時には併用内服薬に CYP に関与する薬剤がないか確認することが大切である。また、オピオイドスイッチング時にはオピオイドを単純に同等量換算せず、相互作用による作用減弱や副作用等を考慮し、定期的内服のオピオイド量を決定することの大切さを本症例を通して実感した。今後の緩和ケアラウンドや病棟業務においても薬学的介入を含めた患者フォローが必要である。

一般演題 1

3. ピッキングサポートシステムを用いた調剤過誤防止への取り組み

○細谷 拓史、草富 翔太、宮本 康平、渋谷 貞一、笠川 益夫、青柳 哲治、小川 純也
福井赤十字病院 薬剤部

【目的】2014年10月より調剤過誤を防止する目的で、ピッキングサポートシステム（処方情報に基づき、ピッキングした薬剤と数量が正しいかを照合するシステム）を以下の条件で使用してきた。①錠剤分包機にセットされていない薬剤の手撒き作業時②規格違いや名称が類似したものが存在する薬剤の調剤時③当直時の一人調剤時。しかし調剤過誤を完全になくすことは出来ていない。さらなる調剤過誤防止を目的に、2019年8月より原則全ての内服薬、外用薬、自己注射薬に使用範囲を広げた。その結果を、調剤過誤につながるヒヤリハット件数で比較し考察する。

【方法】ピッキングサポートシステムを全ての内服薬、外用薬、自己注射薬に使用し始めた2019年8月の前後4年間において、部内で起こった調剤時のヒヤリハット件数を比較し、カイ二乗検定を用いて有意差を求めた。

【結果】ピッキングサポートシステムを全ての内服薬、外用薬、自己注射薬に使用する前後4年間の平均ヒヤリハット件数/月（処方箋10000枚当たり）は、2017年8月～2019年7月では数量間違い18.96件、薬品違い2.56件、規格違い0.58件、その他0.77件、総数22.87件であったのに対し、2019年8月～2021年7月では数量間違い17.36件、薬品違い0.26件、規格違い0.12件、その他0.41件、総数18.16件であった。数量間違い以外の項目で有意に減少した。

【考察】薬品違いは90%減、規格違いは約79%減と特に大きな減少であり、運用の変更が大きく寄与していると考えられる。しかし0件にはならなかった。要因として、ピッキングサポートシステムの不使用、使用忘れ、システムのアラートに気付かず調剤を進めたこと、システムの不具合などが考えられる。ピッキングサポートシステムの不使用、使用忘れを起こさぬよう、常に部内で意識づけを行う必要がある。またシステムのアラートを見逃さないよう、調剤完了の画面を確認する、システムのみを鵜呑みにせず目視での確認も怠らないことも重要である。現在注射薬については、化学療法剤、高カロリー輸液、カリウム製剤、過去間違いが多かったものに限定している。今後は注射薬へのピッキングサポートシステムの使用をどのように広げていくかが課題である。また病棟配置薬は、現在目視によるダブルチェックでのみ払い出しているが、システムによる管理をすることで、より安全に払い出しができると考えられる。

一般演題1

4. 院内認知症ケア研修会にAI音声付動画を使用した取り組みの評価

○中根 論士、向畠 卓哉、上塚 朋子、佐野 正毅
福井県済生会病院 薬剤部

【目的】今年度の院内認知症ケア研修会において、薬剤部は認知症治療薬の説明動画を作成することになった。動画を最後までみてもらう工夫の一つとして、「ゆっくり解説」を参考にした対話形式の解説並びに字幕を添えた AI 音声付解説動画を作成し、その効果を評価した。

【方法】「ゆっくり解説」の動画を参考にして、認知症治療薬の動画を作成し、2022/9/1 から 2022/9/30 の間、院内ポータルサイトにアップロードした。視聴後、薬剤部担当の動画についてアンケートを行った。

【結果】57.5%のアンケート回答者が「ゆっくり解説」について知らなかったが、92.8%の人が動画を最後まで視聴できたと回答した。視聴後の理解度は48%のアンケート回答者が概ね理解したと回答した。また、92%のアンケート回答者が今後も同様の動画を視聴したいと回答した。最後まで視聴できないもしくは、今後も視聴したくないと答えたアンケート回答者の主な理由は、今回使用したAI音声に対する不満がほとんどであった。

【まとめ】薬剤の解説動画をAI音声付動画であっても概ね受け入れられると考える。新規薬剤が追加されても、AI音声付動画であれば、修正が比較的簡単である。他の薬剤の解説動画にも応用が可能と考える。今回のアンケート調査で改善点（AI音声の選別や解説図の工夫など）が分かり、今後の動画作成に活かし、様々な薬剤の解説動画の作成に繋がっていききたい。

一般演題 2

5. 病院薬剤師偏在の要因分析

～医薬分業が薬剤師不足に与える影響について～

○渡部 貴晶¹, 浦田 愛理¹, 須河内 愛実¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}

¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会

【目的】 今後の全国の薬剤師の需給状況について、薬剤師の総数としては、今後数年間は需要と供給が均衡している状況が続くことになるが、長期的に見ると供給が需要を上回ることが見込まれると予想されている。一方地域での偏在も問題となっており、北陸地域、特に富山県では薬剤師不足が深刻であり、病院薬剤師のみならず保険薬局、行政、製薬業界等どの分野においても薬剤師の確保が困難な状況である。薬剤師偏在の影響は、各医療圏に於いて必要な薬剤師需要が薬剤師供給を上回った場合に顕現すると考えられる。薬剤師需要増加には医薬分業の進捗が影響していると考えられるため、「医薬分業の進捗が薬剤師需要に与える影響を明らかにして、今後の薬剤師需要の動向を予測すること」を目的として調査、分析を行った。

【方法】 政府統計ポータルサイト e-Stat、日本薬剤師会「医薬分業進捗状況」からのデータを基に以下の項目について検討を行った。

- ①各都道府県の医薬分業率と薬剤師数の関係の調査 (H30 年度) (1)院外処方率と病院薬剤師数の相関 (2)院外処方率と薬局薬剤師数の相関
- ②各都道府県の医薬分業の進捗と薬剤師数の変化 (H20-H30) (1)院内処方増加数と病院薬剤師数増加数の相関 (2)院外処方増加数と薬局薬剤師数増加率の相関
- ③北陸三県の医薬分業率と薬剤師数の変化の状況 (H20-H30)

【結果・考察】 ①各都道府県における院外処方率と 10 万人あたり病院薬剤師数では相関係数 $r = -0.559$ となり負の相関が認められた。10 万人あたり病院薬剤師数が多くても院外処方率が低い場合は病院薬剤師数不足が発生している可能性が考えられた。②処方箋増加数と薬剤師数増加には強い相関があり、年間院内処方 1 万枚の減少につき 0.65 人の病院薬剤師の減少、年間院外処方 1 万枚につき 3.66 人の薬局薬剤師の増加が示唆された。院外処方率の上昇は薬剤師需要の増加をもたらすと考えられた。③H20～H30 の間の院外処方率の増加は全国平均 14%であるのに対して、北陸三県は 20%を超えているが、薬剤師総数の増加は小さく薬剤師不足が発生している可能性があり、薬剤師供給に問題があると考えられた。以上の結果及び北陸三県では未だ院外処方率が低い現状から今後も薬剤師需要が増加することにより、薬剤師不足が深刻化する可能性が考えられる。

一般演題 2

6. 病院薬剤師偏在の要因分析第 2 報

-薬剤師教育 6 年制移行時における大学定員等の変化が薬剤師供給に及ぼす影響-

○浦田 愛理¹, 渡部 貴晶¹, 須河内 愛実¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}

¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会

【目的】我々は薬剤師需要増加の要因である医薬分業の進捗について調査したが、北陸三県では医薬分業の急速な進捗にも拘わらず、薬剤師が確保できていない現状が明らかになった。薬剤師業務に従事している薬剤師数は、全国では順調に増加しているのに対して、富山県では 6 年制薬剤師が輩出されるようになって以降、ほぼ横ばいとなっている。石川県、福井県でも全国平均と比較して薬剤師増加率は低い。そこで「薬剤師教育 6 年制移行前後における薬剤師供給の変化について調査して、今後の薬剤師供給の動向を予測すること」を目的として分析することとした。

【方法】政府統計ポータルサイト e-Stat、日本病院薬剤師会会員名簿（2022）、厚生労働省医薬・生活衛生局都道府県別薬剤師国家試験合格者数からのデータを基に以下の項目について検討を行った。

- ①都道府県別薬剤師国家試験合格者数と薬剤師数増加の相関
- ②北陸三県の薬剤師国家試験合格者数の推移（第 92 回～107 回）
- ③北陸三県の人口 10 万人あたり薬剤師国家試験合格者数の比較（H21, 22-H31, R2）
- ④北陸三県薬学部への北陸三県病院薬剤師の供給依存度

【結果・考察】①相関係数 $r = 0.916$ と強い正の相関があり、都道府県別薬剤師国家試験合格者数は各都道府県の薬剤師増加の指標となると考えられた。②薬剤師国家試験の合格者数は 4 年制卒中心の H19～H21（第 92～94 回）平均と 6 年制卒中心の H24～R4（第 97～107 回）平均では、富山県 4 割超減、石川県約 3 割減、福井県では横ばいであった。③人口 10 万人あたり合格者数は H20-21 全国 8.5 人富山 9.2 人石川 9.3 人福井 3.5 人、H30-H31 全国 7.8 人富山 5.8 人石川 6.8 人福井 6.1 人で富山、石川の合格者数が減少しており北陸三県における薬剤師国家試験合格者数の減少が薬剤師供給不足の原因になっている可能性が高いと考えられた。④北陸三県の病院薬剤師の供給は、約 60%を富山大、金沢大、北陸大に依存しており、6 年制薬剤師輩出以降も傾向は変わらないが富山大からの供給減少が目立つ。北陸三県各県病薬の H24 以降卒者の割合を比較すると、富山 31.5%石川 37.1%福井 36.2%と富山県病薬の割合が低くなっており最大の供給元である富山大学からの供給減が影響していると考えられた。すなわち薬剤師教育 6 年制以降の定員等の変化による地元大学からの新卒薬剤師供給減が現在の薬剤師不足につながっていると考えられた。

一般演題 2

7. 病院薬剤師偏在の要因分析第 3 報

～薬剤師需給から見た今後の薬剤師偏在の動向に関する考察～

○須河内 愛実¹, 渡部 貴晶¹, 浦田 愛理¹, 高島 吏華¹, 吉井 千菊¹, 星野 智美¹,
波能 満理恵¹, 脇田 真之^{1,2}

¹射水市民病院 薬剤科, ²富山県病院薬剤師会

【目的】全国の薬剤師従業者数は毎年約 5 千人増加している。過去 20 年間の薬剤師国家試験合格者数は平均 9 千人弱であるがリタイヤする薬剤師も年間数千人にのぼると考えられるため新卒薬剤師だけでは従業者の増加には追いつかず薬剤師免許保有非従業者（この演題のみ以下「ストック」）も重要な薬剤師供給元となっている。ストックは年代が高くなるほど多くなる傾向にあるが薬剤師従業者の増加とともに年々減少している。そこで我々は「薬剤師の年代別従業者人口の変化から今後の薬剤師供給の動向を推測すること」を目的に分析を行った。

【方法】政府統計ポータルサイト e-Stat のデータから以下の項目について分析した。

- ①薬剤師従業者数の年代別構成傾向（全国-富山 H12-H22-R2）
- ②薬剤師従業者数の年代別構成と生年別の増減（全国-富山 H22-R2）
- ③H22-R2 の増加率を基にした R22 の薬剤師数の予測（全国-富山 北陸三県）

【結果・考察】①薬剤師従業者の年代別構成傾向について全国と富山県を比較すると富山では令和 2 年にはストックが枯渇しつつあり薬剤師供給に支障をきたしている可能性が考えられた。②全国では H22 年に 25～29 歳、30～34 歳、35～39 歳の群に於いて 10 年後にはそれぞれ 1.03 倍、1.08 倍、1.03 倍と増加しており育児終了する年代になると復職者、就職者により薬剤師数が増加していると考えられるが、ストックが枯渇している富山県では 35 歳以上のすべての年代で薬剤師数は減少しており薬剤師供給に悪影響を与えていると考えられた。③H22-R2 の増加率を基にして R12 の薬剤師数を予測した場合、増加率は全国 1.12 倍、富山 0.98 倍、石川 1.07 倍、福井 1.12 倍となり、特に富山では薬剤師需要の増加に関わらず薬剤師数は減少する可能性がある。薬剤師供給に於いてストックの存在は重要だが富山県内では既に枯渇しつつあり、薬剤師増加対策が喫緊の課題であると考えられた。[第 1～3 報総括] 薬剤師不足の要因として薬剤師需要の面では「医薬分業の進捗」、供給では「地元大学からの新卒薬剤師供給減」「地域における薬剤師免許保有非従業者の減少」が考えられ、北陸三県ではこれらの要因により薬剤師不足が発生していると考えられた。薬剤師不足は、病院薬剤師だけに限らず地域の薬剤師総数を増加させなければ解決しないと考えられ、薬剤師関連団体、行政、大学が連携して取り組む必要がある。

一般演題 2

8. 後発医薬品ポスト 80%時代における基本的な医薬品情報の行く末は！ 後発医薬品と先発医薬品の基本的医薬品情報に関する比較検討

○後藤 伸之¹, 古俵 孝明¹, 渡辺 享平¹, 塚本 仁¹, 酒井 隆全², 大津 史子²
¹福井大学医学部附属病院 薬剤部 ²名城大学薬学部 医薬品情報学研究室

【目的】後発医薬品 (GE) ポスト 80%時代を見据え、2018 年度より薬価制度抜本改革にて長期収載品 (G1 品目) の市場撤退スキームが導入され、条件が整えば企業の希望により先発医薬品は市場から撤退することが認められている。先発医薬品の撤退により販売が中止時に、添付文書やインタビューフォーム (IF) などの基本的な医薬品情報は消滅してしまう可能性がある。そこで、GE の基本的医薬品情報のみで医薬品適正使用が実践できるかを検討することを目的に、基本的医薬品情報の先発医薬品と GE の間で比較を行った。

【方法】対象薬剤は、2022 年 3 月において GE 置き換え率が 80%以上の長期収載品とした。調査対象は PMDA ウェブサイトに登録されている添付文書と IF とし、調査項目は情報量指標として文字数・単語数、引用・参考文献の数とした。また IF では「該当資料なし」の項目数も計測した。

【結果】添付文書は、旧記載要領と新記載要領で作成されたものが混在しており直接的に比較することが難しい状況であったが、旧記載要領で作成された添付文書の情報量指標は、先発医薬品と比較して GE において少ない場合が多くみられた。一方、新記載要領で作成されたものは先発医薬品と GE とでは大きな違いは見られなかった。IF においても作成時に準拠した IF 記載要領が複数存在し、先発医薬品と GE とでは異なる場合が多かった。IF の情報量指標は、GE では先発医薬品と比較して明らかに少なかった。

【考察】医療現場では、先発医薬品の下で創出された新規有効成分の承認申請に必要な情報及び製造販売後に収集された安全性情報と GE が有する特有な品質確保情報を融合して臨床判断を行い各個別患者に対応しており、どちらかが欠けても適正使用の実践は難しい。GE の添付文書における情報提供については、厚生労働省より通知 (2018 年 4 月) が発出され充実が求められている。今回の調査でも新記載要領で作成された添付文書では先発医薬品と GE では大差がみられなかった。IF 記載要領は、複数存在するが基本的な項目において大差はなく情報量指標による比較は可能と考える。IF の情報量指標は、GE において劣っており医療現場において医薬品適正使用を実践するには先発医薬品の IF に頼らざるを得ない状況である。以上の結果より、先発医薬品が市場撤退した後も PMDA において基本的医薬品情報源は市場撤退時版である旨を明記した上で継続して閲覧を可能にする等の対応が必要と考える。

一般演題3

9. ベンゾジアゼピン受容体作動薬の使用障害患者に対して多職種連携を行った一例

○金 俊孝、坪内 清貴、嶋田 努、崔 吉道
金沢大学附属病院 薬剤部

【背景】日本は先進国の中でも睡眠薬の処方率が高く、ベンゾジアゼピン受容体作動薬（BZD系薬）の依存、乱用が問題になっている。中止するにあたり、離脱症状が出現することから時間をかけた漸減を行わなくてはならないため、患者の強い意思や家族のサポートが必須であり、治療に難渋することも多い。今回、BZD系薬の使用障害患者に対して、薬物治療へ介入するとともに、多職種連携を行った症例を報告する。

【症例】50歳、女性。ドクターショッピングにより睡眠薬を多数受け取っており、1日にゾルピデム50mgを内服していた。入院時にジアゼパムへ置換し漸減することとなったため、漸減スケジュールを主治医とともに検討し、減量への不安を視覚的に軽減するための剤形変更を提案した。また、離脱症状について病棟全体で共有し、副作用モニタリングを実施した。不眠の訴えに対しては、依存性のないトラゾドンの開始を提案した。その後退院予定となり、多職種カンファレンスが開催されたため、ドクターショッピングへの対応や離脱症状のモニタリングを目的として、薬局薬剤師による訪問薬剤指導を提案したところ、患者の同意も得られ導入されることとなった。導入に際し、患者への介入がスムーズに進むよう、入院時の指導内容や患者のキャラクタなどについて、薬局薬剤師へ情報提供を行った。外来治療へ移行した後、薬局薬剤師からのトレーニングレポートが病院へ届き、服薬は適正に行われており、離脱症状や副作用はみられていないことが報告された。ドクターショッピングも行われていない様子であり、ジアゼパムは2.5mg/日まで減量されていた。

【考察】薬剤師の薬物治療への介入によりBZD系薬の減量がスムーズに行われた。また、薬局薬剤師へ適切な情報提供を行うことで、薬物治療への介入がよりの確で有意義なものになることを実感した。今後も睡眠薬の適正使用に務めるとともに、シームレスな薬物療法を患者へ提供するため、薬局薬剤師による介入が増えるような支援ができるように心掛けたい。

一般演題3

10. 当院における IBD チームへの薬剤師のかかわり

○坂林 加奈子¹、中谷 敦子²、本江 隼人³、森本 睦未³、吉川 英里¹、麻生 美佐子¹
¹高岡市民病院 薬剤科、²高岡市民病院 消化器内科、³高岡市民病院 看護科

【背景】IBD（炎症性腸疾患）は若年での発症が多く、治療は長期にわたる。その間寛解を維持しQOLを保つためには、個々の患者に応じたきめ細かいケアが必要であり、多職種が密に連携するチーム医療の必要性が指摘されている。また、近年新規薬剤の登場により治療が複雑化してきており、薬剤師による薬学的知識を活用した患者指導や薬剤の適正使用が重要である。高岡市民病院（以下当院）に通院される IBD 患者は年々増加傾向にあり、チーム医療、タスク・シフト/シェアの観点から 2021 年 9 月より医師・看護師を中心とした IBD チームが発足し、同 10 月からは薬剤師も加わって活動を開始した。その中で、薬剤師の取組と今後の課題について報告する。

【取組】下記 2 点について取り組んだ。①薬剤師による指導：IBD チームで協議の上、分子標的薬、注腸製剤や坐剤など外用剤の新規導入患者を対象とした薬剤師の介入を開始した。指導はがん外来指導担当者 1 名が兼務し、医師の診察後、外来看護師からの依頼を受け、服薬指導や副作用確認を行う運用とした。②薬薬連携：2022 年 6 月より長期的なアドヒアランスの確保、副作用の早期発見を目的とした病院・保険薬局間の連携のため、外来での患者指導後に患者の同意が得られた場合、施設間情報連絡書を用いて病院から保険薬局へ情報提供を行う運用を開始した。

【結果及び考察】①薬剤師の介入開始後 1 年間で 14 名（UC/CD = 11/3）（全患者に対する割合：9.3%）の指導を実施した（分子標的薬の導入：8 名、外用剤の導入：3 名、その他：3 名）。平均年齢は 39.5 歳で、総指導回数は 17 回（平均：1.2 回/人）であった。また、2022 年 4 月よりチームからの要望で指導対象患者を限定せずに実施することとなった。②運用開始後、4 件の施設間情報連絡書を作成し FAX で送信した。うち 2 件で保険薬局からトレーシングレポートの提出があり、アドヒアランス・副作用の確認が実施されていた。

IBD 領域において薬剤師の介入は有用であると考えられ、当院でも薬剤師の継続的な患者への介入、指導対象患者の拡大が望まれるが、専門の認定制度がなく診療報酬もつかない現状では十分な人員を割くことが難しい。引き続き保険薬局との連携体制を構築していくことが今後の課題である。

一般演題3

11. 退院時薬剤情報提供書を用いた訪問看護師との情報共有フローチャートの導入

○讓原 千広、荒木 遼太、小川 紗知、波多 晶子、中澤 美樹子、橋爪 和恵、
窪田 真弓、鶴居 勝也
公立南砺中央病院 薬剤科

【目的】公立南砺中央病院(以下、当院)は、地域包括ケア病棟 52 床と急性期病棟 52 床、療養病棟 45 床を有し、急性期から回復期、慢性期までの病床機能を持つ中規模病院である。当院の医師は訪問診療を行い、在宅医療を実施することで地域包括ケアシステムを担っている。同じく在宅医療を支える訪問看護師は同じ施設内に南砺市訪問看護ステーションが設置されているものの、事業主が異なるため訪問看護対象患者の入院中の経過や退院時服用薬などのケアに必要である患者情報を電子カルテで確認することができない。そのため、患者の状態や服用薬剤については、患者宅に訪問時に家族からの聞き取りや薬剤を確認することで初めて知ることになるという問題点が散見された。そこで当院では、退院時薬剤情報提供書を保険薬局だけでなく訪問看護師にも発行することで、訪問看護対象患者における退院後の継続した服薬管理を提供することを目的とした。

【方法】当院施設内に設置された訪問看護ステーションの看護師を対象に 2022 年 6 月にアンケート調査を実施した。訪問看護師との退院時薬剤情報提供書を用いた情報共有フローチャートを作成し、2022 年 8 月以降に当院の地域包括ケア病棟および急性期病棟から退院し、退院後に訪問看護師が介入する患者を対象に退院時服薬情報提供書を発行した。

【結果】2022 年 8 月、9 月の対象患者は 8 月 10 名、9 月 4 名の合計 14 名であった。そのうち 11 名に退院時薬剤情報提供書を発行し、訪問看護ステーションへの情報提供を行った。一方で、退院時薬剤情報提供書を発行できなかった 3 名の内訳としては、入院中の内服薬に変更点がなかった 2 名と内服薬が全て中止となり退院時服薬管理指導を行わなかった 1 名であった。アンケート調査は、南砺市訪問看護ステーションの訪問看護師 6 人を対象に行い、6 人全員から退院時服用薬の情報が必要という回答を得た。

【考察】退院時薬剤情報提供書を用いて訪問看護師と入院中から退院時までの情報共有を実施することで、退院後の在宅医療においても継続して安全な薬物治療が提供できると考えている。また、退院患者における退院時薬剤情報提供書の発行は、全ての退院患者を対象として継続して行っているため薬剤師の負担を増やすことなく本取り組みを実施することができた。本取り組みを継続して実施し、訪問看護師が必要とする情報を精査・共有していくことで、より有益な退院時薬剤情報提供書になるよう検討・改善をしていく予定である。